

「地域包括ケア時代の在宅栄養管理～回復期リハ病棟から生活期へのリハ栄養アプローチ～」

座長	岡本 隆嗣 (西広島リハビリテーション病院院長)
	高山 仁子 (熊本機能病院診療技術部栄養部)
シンポジスト	江頭 文江 (地域栄養ケア PEACH 厚木代表)
	桐谷裕美子 (医療法人輝生会本部)
	加辺 憲人 (船橋市立リハビリテーション病院訪問チームマネジャー)

厚生労働省は平成 26 年度より地域包括ケアシステムを制度化し、在宅高齢者の自立を阻害する低栄養を問題視しています。近年の報告では、在宅療養高齢者において 8 割に低栄養または低栄養リスクを認められることが明らかとなりました。背景にはフレイル・サルコペニア・脳卒中や認知症など、要介護状態のみならず口から食べることの障害をもたらす要因を抱える高齢者が多く、結果的にフレイルやサルコペニアが悪化する悪循環が存在すると推測されます。栄養管理とリハビリテーション(以下、リハ)を平行して行うリハ栄養は、障害者やフレイル高齢者の自立生活を保つ方策として重要性が高まっています。回復期リハ病棟で低栄養を予防・改善するのは当然ですが、退院後の地域生活でも栄養障害を予防し、口から食べることを継続するための食支援を含めたリハ栄養は重要な課題です。

今回のシンポジウムでは、長年にわたり地域での栄養ケア・食支援を実践されている江頭文江氏に、在宅栄養管理と食支援の実際についてお話いただきます。また、回復期リハ病棟を無事退院したとしても、摂食嚥下障害で食形態に工夫が必要であったり、食事準備自体に不安があったり、糖尿病や腎疾患を抱えていたり、と自宅で生活する上での食事に関わる不安・問題が残ることがあります。これらの情報を遅滞なく生活期のサービスにつなげ、本人・介護者にとって安定した在宅生活を支援する必要があります。回復期から生活期へのつなぎ目の部分に関して、同法人内で訪問リハと訪問栄養指導が協働している輝生会の取り組みを紹介していただきます。

在宅療養高齢者に関わるのは、回復期リハ病棟と同じく多職種です。普段実施しているケア・サービス、リハを見つめなおすきっかけとなるシンポジウムにしたいと考えます。